

2022年2月13日
宮崎中部教会創立97周年記念礼拝
牧師 乾元美

歴代誌上 29 : 10～20

ルカによる福音書 21 : 1～4

「献げもの」

<創立97周年>

1925年2月18日、この宮崎の地で、神さまをほめたたえ、また福音を告げ知らせる礼拝が執り行われました。今から、97年前のことです。

当時、そこで礼拝をささげていた人は、今はもう一人もいません。しかし、月日が流れても、イエスさまの救いは告げ知らされ続け、信仰は受け継がれ、この地で、この教会に、多くの者たちが加えられてきました。何十人、何百人が洗礼を受け、罪を赦され、イエスさまの体に結ばれ、永遠の命に与ってきました。そして、聖書の御言葉を聞き続け、共に主の食卓を囲み続けてきました。

そして今、この教会の歴史の一番最後尾に、ここにいるわたしたちが連なっている訳です。

そして、この教会の歴史は、このわたしたちで終わるのではありません。さらにここから、新しい人々が加えられ、この群れはますます成長していきます。

それは、イエスさまが再び来られる日まで続きます。その日はもしかしたら明日来るかも知れないし、百年後、千年後かも知れません。でも、それは神さまがお決めになることです。

わたしたちはただ、神さまに愛され、イエスさまに救われ、聖霊に信仰を与えられ、礼拝する者として今、ここに立っていることを、心から喜び、感謝し、神さまをほめたたえ続けていくだけです。

…この教会の歩みは、(それは、この宮崎中部教会だけのことではなく、すべての時代の、すべての世界の教会のことでもあります、) その歩みは、これまでも、今も、これからも、すべて、ひたすら、神さまの御力、神さまの恵みによるものです。

一人の信仰者が興されること。救われた群れがここにあること。主の日ごとに集められ、礼拝をささげる恵みが備えられていること。これらはすべて、神さまのお働きであり、何もかも、神さまのおかげです。

しかし、救われ、教会に集められた者たちは、神さまがすべてしてくださるからと言って、寝転んでいたり、のんびりしていた訳ではありません。

イエスさまの救いの恵み。その大きな贈り物を受け取った者たちは、自分がそれほどに神さまに愛され、自分がすっかり神さまのものとされていることを喜び、祈りをささげ、献げものをささげ、自分自身をささげ、いただいている豊かな恵みに、お応えしようと努めてきたのです。

多くの伝道者が御言葉を語り、多くの長老たちが祈り支え、多くの信徒たちが奉仕をささげ、この地で神さまの御業がなされるようにと、神さまに仕えてきました。

教会の歴史は、そのように、神さまの豊かな恵みと、また信仰者の喜びの応答によって、織りなされて来た歴史なのです。

わたしたちもまた、この歴史に連なって、神さまの恵みに喜んでお応えしていきたいと願います。これから先に、まだまだ神さまがなそうとしておられる救いの御業のために。これから教会に招かれて、救いに与ることを待っている人々のために。わたしたちに出来る、あらゆることを、精一杯献げていきたいと願います。

今日の聖書箇所は、ルカによる福音書を毎週続けて聞いていく中で、ちょうどこの創立記念日に与えられた御言葉です。

ここでは、やもめが献げた献金について語られています。献金というのは、神さまへの献げものであり、それは献げる者の神さまへの思いや、信仰の態度の表れであるということが出来ます。

神さまに救われた一人一人が、恵みに生かされている教会が、どのように神さまの御前に立っているのか。どのように恵みにお応えしようとしているのか。どのようなわたしたちの心を、神さまが喜ばれるのか。そのことを、今日の御言葉から聞いていきたいと思えます。

<やもめの献金>

さて、1 節には、「イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた」とあります。

まず、先週のところで、イエスさまは民衆の中で話しておられ、特にその中で弟子たちに語りかけておられました。当時、多くの人々に教える時に、指導者はどこかに腰をかけて語るのが一般的だったようです。それで、座っておられるイエスさまが、少し目を上げて、近くの賽銭箱をご覧になっていたのでしょうか。

「賽銭箱」という表現はちょっと神社のようで気になりますが、新しい聖書の訳では「献金箱」となっています。

これが実際にどのようなものだったかは、実はよく分かっていません。

一説によると、箱から 13 本のラップが突き出したような形をしており、目的によって献金を入れる場所が決まっていた、と言われていています。だから、沢山の献金をささげたら、金属のラップの口にコインが当たって大きな音を立て、「お、あの人はたくさん献げたんだな」というのが分かったのかも知れません。

とにかく、ここで金持ちたちは、たくさん献金をしていたのでしょうか。

しかしそこに、ある貧しいやもめがやって来ました。

やもめとは、夫を亡くした人のことです。当時のユダヤ人社会では、女性が一人で自立し

て生きていく、というのはとても困難なことでした。ですから「やもめ」は「みなしご」と並んで、特に弱く小さい者の代表格でした。生活は親戚を頼ったり、コミュニティの中で特別に保護されなければならない、本当に貧しい、苦しい生活をしていただと思われま

この貧しいやもめが、レプトン銅貨二枚を、献金箱に入れました。

レプトンは最小の銅貨の単位で、1デナリオンの128分の一。1デナリオンは、一日働いた賃金相当、と言われてい

しかし、これを見てイエスさまは言われました。「確かに言うてお

<献金の基準？>

さて、わたしたちも、献金をどれくらい献げたら良いか、というのは、実の所よく分からない、と思っ

しかし、献金は、一人一人が思いをもって神さまに献げるものですから、決して人と金額を比べたりするものではありませんし、当然、サークルの会費のように金額が決まっている

でもそれは、それぞれで本当によく考えて、自分なりの信仰の決断を持って決める、ということであり、実に難しく厳しいことなのです。

そしてここで、イエスさまが献金において見つめておられるのは、直接的な金額の多い少ないではない、ということ

イエスさまは、金持ちたちとやもめを、それぞれこのように見つめておられます。

金持ちたちは、有り余る中から献金した。つまり、生活を十分豊かに送る分を確保し、余裕がある中から献金した、ということ

一方で、やもめは、乏しい中から持っている生活費を全部入れた、と言われてい

「乏しい中から」と訳されていますが、この「乏しい」は、「ない」という意味の単語です。つまり、ないものの中

そして「生活費を全部入れた」とありますが、この「生活費」という言葉は、「生活」や「人生」という言葉

そして、イエスさまは、このやもめこそ、誰よりもたくさん入れた、と言われま

しかし、ここで注意しなければならないのは、これはまた、生活費の何割を献金すれば良いか、という問題ではない、ということです。生活費の9割、10割を献げることが正解だ、素晴らしいことだ、ということではありません。

ちなみに旧約聖書には、収穫の十分の一を献げる、という規定があります。それで教会においても、ご自分の全収入の十分の一を献金する、というように、献げものの目安にしている方もおられます。それは基準として良いと思います。しかしその根本は、持っているものの何割を献げれば良い、十分だ、ということではありません。

また一方で、自分の生活の糧を全部投げ打って献金し、すっからかんになるべきだとか、そういうことを言っているのでもありません。

じゃあ、わたしは全財産を献げますから、明日から家も食べ物も無くなります。どうやって生きてらいいですか。そうやって開き直るかのように、自分が与えられている生活の責任を放棄するような、無謀なことをすることも、決して望まれていないことです。

では、イエスさまは、やもめのレプトン銅貨二枚の献金に、何をご覧になったのでしょうか。やもめは、どういう思いで、なげなしのレプトン銅貨二枚を献金したのでしょうか。

<やもめの思い>

ここで、前回の20:45~47で、イエスさまが、「律法学者に気を付けなさい」と語られたことを思い起こしたいと思います。

律法学者とは、人々に神の律法を指導する人々です。彼らは、神さまの御言葉に、神の民が正しく従うことが出来るように。神さまに喜ばれる生活を送ることが出来るように。その指導を託されていた人々です。

しかし彼らは、いつしか民から尊敬されること、特別に扱われること、認められることを求めるようになっていきました。人々の目を気にして、人々から承認されたいと願い、そのために、立派そうに見せたり、敬虔さをアピールするような振る舞いをしていたのです。

そうして、自分自身も、また指導すべき民をも、神さまの恵みから遠ざけるようなことをしていました。

イエスさまは、自分や人を、神さまの恵みから遠ざけるようなこと、それはつまり、「罪」ということですが、そのことを厳しく戒められました。

そして注意されたのは、誰でも、人の目を気にするのではなく、まず、神さまの眼差しを一番に心にかけてください、ということです。

人々から認められるため、敬われるために、そちらに心を奪われて、神さまのことを蔑ろにしてはいけません。まず何より、あなたに命を与えた神さまが、あなたたちの存在を認め、受け入れ、あなたの命そのものを、「よし」、「然り」と言って喜び、肯定して下さっている。だから、いつも第一に、心も、思いも、行ないも、まず神さまに向かうようにしなさい。人

に気に入られることではなく、神さまに喜ばれることを。人の目を気にするのではなく、既に神さまがあなたを認め、受け入れ、愛して下さっていることに、まず心を向けなさい。

イエスさまは、そのことを、弟子たちに教えられたのです。

そして、これを話し終え、目を上げると、このやもめの姿があったのです。

それはまさに、神さまの眼差しにこそ心に向け、神さまの恵みを受け止めて生きる、信仰者の姿でした。それをイエスさまはご覧になったのです。

「この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れた」。何も無いところから、自分の命を、自分の人生を、自分の命のすべてを、神さまに献げた。

何も無いのです。そうです。始めから、命も、人生も、生活も、すべて神さまから与えられているものであり、わたしたちのすべては、始めから最後まで神さまのものなのです。

貧しく、何も持たず、与えられなければ生きられないやもめは、自分は何も持っていないこと、そしてすべては神さまから与えられていることを、よく知っていたのでしょうか。

やもめは恐らく、自分は生活費を全部入れた、これぞ献金だ、と誇るような気持ちは、みじんもなかったはずです。

また、金持ちがたくさん入れたのに、自分はこれだけしか入れられないと言って、人と比べて恥ずかしいと感じたり、惨めな気持ちになっていた訳でもないと思うのです。

今日も神さまに生かされている。今日も神さまから命を与えられている。そして、今日も神さまを礼拝しに来て、今自分の手もとに、レプトン銅貨が二枚ある。わずかでも、小さくても、ちゃんと神さまに献げることが出来るものを持っている。このレプトンを与えて下さって、ありがとうございます。献金が出来ると恵みを感謝します。今日もわたしを生かしてください、ありがとうございます。

きっとやもめの心は、そんな神さまへの思いで、満たされていたのではないのでしょうか。

おそらく献金を献げた時、どの金持ちたちよりもきっと、このやもめの心が、一番穏やかで、喜びに満ちて、平安であったに違いないと思うのです。このレプトン銅貨を手放して、明日の生活はどうしようと、不安に震えていたのではないと思うのです。むしろ、神さまが自分のことを顧み、守り、養って下さることに、心から信頼をして、すべてを委ねて、喜んでレプトン銅貨を、いや、自分自身を、献げたのだと思うのです。

…献金とは。神さまへの献げものとは。余裕がある中からとか、収入の何割とか、生活費の何割とか、そういったことではなくて。日々、神さまの恵みと守りのご支配の中に生かされていることを味わっているからこそ、心からの神さまへの信頼と感謝の表れとして、献げられるものなのです。

ですから、日々の中に、神さまに生かされている生活。神さまの恵みを見つめる生活がなければ、わたしたちの心に、すべてを委ね、すべてを献げようという思いは生まれてこない

に違いありません。

イエスさまがやもめの献金に見ておられたのは、このやもめが、本当に神さまの恵みのご支配を信じ、そこに生き、神さまの恵みを覚えて日々を歩んでいる、ということです。

そしてその感謝の心を、信頼の思いを、やもめは「献げもの」を通して、自分の生活のすべてで、自分の命のすべてで、神さまに示している、ということなのです。

<御手から受け取って、差し出す>

今日の旧約聖書にあった、ダビデ王の思いもまた同じでしょう。これは、イスラエルの民が、神さまを礼拝する神殿を建てるために、多くの寄進をした、献金をした、という場面です。それはたくさんの献金が集まりました。しかし、ダビデ王は言うのです。

「わたしたちの神よ、今こそわたしたちはあなたに感謝し、輝かしい御名を賛美します。このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう、わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。」

わたしたちもそうです。すべては、神さまからいただいたものです。その上でわたしたちは、そのように神さまの御手から受け取ったものを、自由に、自分で決断して用いることが許されているのです。神さまは信頼して、期待して、わたしたちにすべてを委ねて下さっています。

それを、わたしたちが日々の中で、第一に神さまを思って用いるとき。神さまへの感謝と、神さまの喜びのために用いようとする時。わたしたちは、喜んで与えて下さる神さまと両想いになる、と言いますか、そこに神さまとの親しい交わり、神さまと共に歩む、生き活きとした神さまとの関係が築かれていくのです。

献げものは、もちろんお金だけではないでしょう。お金が一番具体的に目に見えて、動かせて、分かりやすいものですが、時間も、身体も、能力も、それこそ、一日一日の生活も、すべてが与えられているものであり、献げることができるものです。

たとえば、一日の自分の用事を済ませて、少し時間があるから祈りをささげると。祈りをささげるために、一日の予定を調整して、祈りの時間を確保するのとでは、わたしたちの心持ちや、神さまを思う度合いは、だいぶ違うと思います。

わたしたちの思いの、行ないの、心の一番目が、神さまであるかどうか。他のものが優先されていないかどうか。それが、献げものの中に、わたしたちの具体的な生活の中に、神さまへの態度の中に、現れてくるのです。

やもめの、夫を亡くし、貧しく、苦しい生活を余儀なくされるその人生は、人から見れば、不幸な、憐れな人生に思われるのかも知れません。

しかし、神さまの養いと守りに生かされ、神さまの恵みを見つめて歩んでいるやもめは、

神さまの御許にこそ、まことの幸いと平安があることを見出しているのです。だからこそ、生活のすべてを、与えられているものを、神さまのものである自分自身を、喜んで神さまの御手にお渡しすることが出来たのです。

やもめの献金に示されているのは、わたしたちが神さまの眼差しを受け止めて生きる時。神さまの恵みを知り、神さまに命を与えられ、守られ、養われていると知る時。神さまのご支配の中で生きる時。どれだけ、平安に、自由に、喜びに生きることが出来るか。どれだけ安心して神さまにすべてをお委ねすることが出来るか、ということではないでしょうか。

やもめの献金は、まったく自由に、そして本当に心からの感謝をもって献げられた献金です。神さまは、このやもめの心を、やもめの信頼を喜ばれる。やもめが神さまを見つめ、神さまの御手に、喜んで自分を委ねていることを、喜ばれるのです。

わたしたちもまた、神さまの恵みを受け入れ、神さまの御許に憩うことによってこそ与えられる、喜びと、平安と、自由を味わうことが出来るなら。人の目を気にせず、人と比べることもなく、誇ることもなく、卑屈になることもなく、ただ、神さまの御手を信頼して、安心してすべてをお委ねし、喜んですべてを差し出す歩みが出来るなら。そんなに幸いなことはありません。

<イエスさまの眼差し>

そして、このやもめの姿を見つめておられたイエスさまこそ、どれほどお喜びになったことか、どれほど慰めを覚えられたことかと思えます。

イエスさまは、これから十字架の苦しみと死へ、向かおうとしておられるところです。

そうして、人々に救いを与えようとしておられるのに、イエスさまは、敵意と殺意に取り囲まれています。喜んで集まっている民衆も、最も近くにいる弟子たちでさえも、イエスさまの成し遂げようとしておられることを、何も分かっていません。

イエスさまは、まことに孤独の中で、父なる神さまの御心に従って、ご自分の身を御手にお委ねになり、命を献げようとしておられるところなのです。

そこに、神さまと共に生き、心から神さまに自分を献げる者がいた。神さまに信頼し、御手に委ね、御心に従って、喜んで歩むやもめがいた。この人をイエスさまは見つめられ、心から喜ばれたのです。

そうしてイエスさまは、すべての人を、この神さまと共に生きる恵みへ招くために。すべての人に御自身の命を与えるために。十字架の苦しみと死へ、向かって行かれたのです。

わたしたちの命は、このイエスさまの十字架の苦しみと死によって。イエスさまの命を与えられて。生かされ、支えられ、養われているものです。

わたしたちが神さまのものである。罪に捕らわれたわたしたちが、罪を赦され、神の子とされる。死ぬべき者が、復活と永遠の命を与えられる。この、恵みを実現するために、わたしたちに与えられたのは、尊い神の御子イエスさまの命だったのです。

これ以上に、何を与えられるものがあるでしょうか。わたしたちは、すべてを持っている。神の御子イエスさまの救いを、その復活の命を、持っているのです。

これ以上に、何を持つべきものがあるでしょうか。すべては神さまから頂いたものであり、わたしたちは感謝と喜びをもって、すべてを差し出し、神さまをたたえるしかありません。

ダビデは言いました。「わたしの神よ、わたしはあなたが人の心を調べ、正しいものを喜ばれることを知っています。わたしは正しい心をもってこのすべてのものを寄進いたしました。また今、ここにいるあなたの民が寄進するのを、わたしは喜びながら見ました。」

わたしたちも、神さまに喜ばれる心をもって、御前に出たいのです。イエスさまの命を与えられ、神さまと共に生きる者とされ、神さまの恵みに生かされていることを日々味わいつつ、自由に、喜んで、神さまにすべてを差し出す者とされたいのです。

わたしたち一人一人が、神さまの恵みを余すところなく受け止め、全身全霊で神さまに喜びをお返ししていくことが出来ますように。

そして、この幸いに、一人でも多くの者が招かれて、この宮崎中部教会の歩みが、何年も、何百年も、神さまの恵みを喜ぶ群れとして、神さまに生かされ養われる群れとして、終わりの日まで導かれていきますように。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちのすべては、あなたからいただいたものです。わたしたちは御手から受け取ったものを、差し出すことしか出来ません。しかし、あなたに生かされ、養われ、支えられている恵みを覚えて、喜んですべてをお献げしたいと願います。どうか受け入れて下さり、あなたの御業に仕えるものとして用いて下さい。

わたしたちの心を、神さまへと向かう思いで満たして下さい。わたしたちは、救い主イエスさまを与えられ、必要なものすべてを与えられていますから、ただあなたにのみ信頼し、生活も、信仰も、命も、終わりも、復活も、すべてをお委ねいたします。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン